

原著論文

布を介して広がる創造的な身体表現

— 大学授業における身体表現活動を題材として —

Creative embodied expression expanding through clothes
: In the activity of embodied expression at the college class

国府田はるか

Key words ; 幼児と表現 身体表現 布 保育者養成 教材

1. 緒言

筆者は、保育者養成課程を有する I 短期大学および I 大学にて、身体表現の授業に携わっている。身体表現は、言語や楽器・画材等を用いずとも、身体のみで表すことが可能なものであり、人間はただそこに在るだけで常に表現している存在であるともいえる。この、人間の存在そのものをまるごと表現として捉えるという視点は、乳幼児の表現を考えていく上でも、非常に重要である。実際に筆者の授業実践の中でも、様々なイメージを具象化するべく、個人やグループでの身体を用いた自由な即興表現を数多く取り入れている。

一方で、表現したい主題のイメージを深め、身体表現をより豊かなものにするために、様々な用具を小道具として活用し、それぞれの素材の特長を活かした身体表現を模索するという手法も授業実践の中で数多く試みてきた。これまで身体表現に関する授業の中で取り入れてきた用具は、布、ボール、フープ、ロープ、新聞紙、すずらんテープ、ビニール袋、カラーコーン、ビニールシート、塩化ビニル管、段ボール、鈴、竹や落ち葉等の自然物等、多岐にわたる。

本論では、上記のような身体表現の質に変化を与え得る用具の中でも、特に形状の可変性が高く、繊細な質感の動きを生みやすい布に着目して論を進めていきたい。

はじめに、保育者養成校や保育現場における布と身体表現を主題とした先行研究の中で主なものを以下に列挙し、これまでの関連研究の動向を整理する。

保育者養成課程における布を用いた身体表現に関する先行研究としては、秋田・石賀 (2015)ⁱ および石賀・秋田 (2015)ⁱⁱ の超伸縮布を用いた総合表現に関する一連の研究が挙げられる。特に、秋田・石賀 (2015) は、音楽・造形・身体表現の 3 要素からアプローチした総合表現の実践をふまえ、「超伸縮布の不思議な質感が新たなイメージを喚起するきっかけ」となった点や、学生が「一つの布を時に生き物のように、特に装置 (モノ) のように自在に扱う様子」、さらには、「布からの感触やイメージを自身の中に取り込み自分たちのものにすることで、実際に布がなくても布との一体感を失わずに表現を行うようになった状態」等、布を用いた創作過程を仔細に捉え分析している。

また、高橋 (2007)ⁱⁱⁱ による研究では、ダンス・身体表現あそびの導入で用いられる課題学習「新聞紙」の代わりに伸縮性のある柔らかい素材の布を用いて学生による模擬授業を行うことで、「布が動きのイメージを広げる教材となりうるか」について検討しており、布がなめらかな動きをイメー

ジさせることにより「新聞紙の限界を補う教材」であることを示唆している。

一方で、保育現場における布を用いた身体表現に関する先行研究としては、松山ら（2018）^{iv} および伊藤ら（2018）^v による表現遊びにおける身体性と造形性に注目した一連の研究が挙げられる。松山ら（2018）は、園における布を用いた活動の参与観察により、薄く透け感のある布の素材は、「動きを引き出しやすく、人との関わりが深まりやすい素材」であるとしている。また伊藤ら（2018）は、布はイメージを共有しやすく、「造形性・身体性を複合的に体现できる表現あそびの教材」であると述べている。

また、古屋（2018）^{vi} による保育現場における布を用いた運動に関する研究もある。ここでは、「イメージから動きを膨らませる素材としての布」の持つ役割が強調されている。

梅原（1998）^{vii} や秋江ら（2000）^{viii} による知的発達障がいのある幼児に対する布を使った運動遊びのアプローチに関する研究も意義深い。梅原（1998）は、布を用いた運動体験の有効性と、心理的刺激に対する側面を考察し、「布を介して動くことは、布を操作するイメージを膨らませ、探索しながら動くことにつながる」とし、「布を使った運動遊びが子どもたちの情緒や社会性に何らかの変化をもたらした」と結論づけている。秋江ら（2000）は、「①安全性②簡易性③可変性④耐久性⑤融通性」を特性とする布の、「心を解き放しそれぞれの特性を生かした自己表出」を促すものであるという性質をふまえ、布が「自由な動きを導き出す教材として有効」であるとし、知的障害幼児の運動指導に有効な魅力的教材の一つであると考察している。

2. 研究目的

本研究においては、布を介して学生たちのイメージがいかに喚起されていくか、さらにはいかに創造的な身体表現が生まれていくか、その過程を明らかにすることを試みる。そのために、大学および短期大学の授業における布を用いた身体表現活動を研究対象とし、それぞれの活動や授業に関わった学生たちが捉えた省察を手がかりに考察を深めていく。これにより、布を用いた身体表現の内実に迫り、一連の身体表現活動の成果と課題を明らかにすることを目的とする。

3. 研究方法

本論では、大学および短期大学の授業における布を用いた身体表現活動を研究対象とする。活動の詳細については、次項にて後述する。

授業実践に関しては、平成 29 年 7 月に実施した I 短期大学の授業「ダンス入門」の活動後の学生による選択式質問紙および自由記述式質問紙、および、平成 29 年 7 月に I 大学で実施した授業「幼児保育特講」の活動後の学生による選択式質問紙および自由記述式質問紙を分析対象とする。なお、選択式質問紙については、Excel を用いた統計分析、自由記述式質問紙については、KHcoder を用いたテキストマイニング分析を行う。I 短期大学における質問紙の実施日は平成 29 年 7 月 19 日、I 大学における質問紙の実施日は平成 29 年 7 月 8 日である。いずれも布を用いた身体表現活動および授業内発表を実施した同日に、質問紙調査を実施した。

なお、I 大学および I 短期大学の受講生はすべて女子学生であった。受講生には、質問紙の結果について匿名性を確保した上で研究に使用する旨を書面および口頭で伝え、承諾を得た。授業を記録した写真についても同様の確認を取っている。

4. 結果および考察

4-1 保育者養成校における授業の概要

(1) I 短期大学における授業の概要

I 短期大学における「ダンス入門」は、保育科および表現文化学科共通の教養科目として設定されている。2017 年度の受講生は、保育科 4 名、表現文化学科 14 名の計 18 名であった。

布を用いた身体表現創作は、15 回の授業のうち、12 回目・13 回目の授業で実施しており、授業内での発表は最終回の 15 回目で実施した。その他の回の授業では、フロアストレッチ、ベリーダンス、モダンダンス、M 市 PR ダンス、M 市お祭りダンス、音楽に合わせた即興表現、小道具を用いた創作ダンス、自然のスケッチをもとにした創作ダンス等、様々なダンスや即興表現をジャンル横断的に取り入れている。

創作に際しては、様々な色彩の布が折り重なり、新たな色を生み出す様相が描かれる Ann Jonas の絵本 “COLOR DANCE”^{ix} の読み聞かせを筆者が行った。展開を理解・共有した上で、筆者の朗読に合わせて、受講生全員で身体表現を行うものとした。絵本の展開は以下の通りである。

“COLOR DANCE” Ann Jonas

- ① This is our dance.
- ② Red and yellow and blue.
- ③ Orange is red and yellow mixed together. No blue.
- ④ Green is yellow and blue mixed together. No red.
- ⑤ Purple is red and blue mixed together. No yellow.
- ⑥ Red and red can only make reds. Yellow and blue can make chartreuse and green and aquamarine.
- ⑦ Red and blue can make magenta and purple and violet. But yellow and yellow can only make yellows.
- ⑧ Blue and blue can only make blues. But yellow and red can make marigold and orange and vermilion.
- ⑨ Blue aquamarine green chartreuse! Yellow marigold orange vermilion! Red magenta purple violet!
- ⑩ Mix them all together and they make browns and grays.
- ⑪ White makes colors pale.
- ⑫ Gray makes them dark.
- ⑬ Black makes them almost disappear!
- ⑭ The end, Thank you! Thank you! Thank you!

創作に用いた布は、110cm × 300cm の光沢と透け感のあるオーガンジー布 6 枚（薄桃色・水色・薄黄色・白色・灰色・黒色）である。

以下に、I 短期大学「ダンス入門」における創作過程の写真を示す。



Fig.1 Fig.2 I 短期大学「ダンス入門」創作過程

創作においては、「布の質感を生かすにはどのように動かしたらいいか」「布をただ動かすのではなく、身体そのものが布と一体化するかのように」等の助言を行った。受講生が主体となって出はけを含む大まかな作品構成を考案し、他者との関わり合いを意識しながら展開していく、即興表現を交えた作品となった。最終回の授業内発表での作品時間は3'34"であった。

(2) I大学における授業の概要

I大学における「幼児保育特講」は、幼児保育を専攻する2学年から4学年までが受講できる科目として設定されている集中講義である。2017年度の受講生は、2学年10名、4学年4名の計14名であった。

布を用いた身体表現創作は、15回の授業のうち、13回目・14回目の授業で実施しており、授業内での発表は最終回の15回目で実施した。その他の回の授業では、フロアストレッチ、ヨガ、ストレッチポールを用いたからだほぐし、エアロビクス、ベリーダンス、モダンダンス、バレエ、コンタクトインプロヴィゼーション、新聞紙を用いた即興表現、「たんぽぽ」や「洗濯機」等のイメージを具象化する即興表現、音楽に合わせた即興表現、小道具を用いた創作ダンス、自然のスケッチをもとにした創作ダンス等、様々なダンスや即興表現等の身体活動を横断的に取り入れている。

創作に際しては、I短期大学の「ダンス入門」の授業と同様、Ann Jonasの絵本“COLOR DANCE”を筆者が朗読し、その展開に合わせて、受講生全員で身体表現を行うものとした。絵本の展開は先の(1)に示した通りである。

創作に用いた布は、110cm×300cmの光沢と透け感のあるオーガンジー布6枚（薄桃色・水色・薄黄色・白色・灰色・黒色）である。なお、I大学の授業では、創作活動の導入として、布に慣れ親しみより豊かな身体表現を引き出すことを目的とし、60cm×60cmの光沢はなく透け感のあるシフォン布30枚を用いた即興的な表現活動を取り入れた。

以下に、I大学「幼児保育特講」における創作過程の写真を示す。



Fig.3 Fig.4 I大学「幼児保育特講」創作過程

創作に際しては、I短期大学と同様、「布の質感」や「布と身体との一体化」について触れたことに加え、ドイツ表現主義の舞踊理論家であるRudolf Labanの提唱したLMA^x（Laban Movement Analysis, 身体動作表現理論）による3つのEffort（Light/Strong, Indirect/Direct, Sustained/Sudden）について解説し、力（やさしく／力強く）・空間（曲線的に／直線的に）・時間（ゆっくりと／速く）の変化への意識を促すような助言を行った。I短期大学と同様、受講生が主体となって作品構成や動きを考案し、他者との関わり合いを維持しながら展開していく、即興表現を交えた作品となった。最終回の授業内発表での作品時間は3'39"であった。

4-2 選択式質問紙の分析結果と考察

次に、全受講生による選択式質問紙への回答に関して、分析を行った。全受講生を以下の4つの群に分類した。各群の人数を以下に示す。

A 群（短期大学非保育1学年群） $n = 14$

B 群（短期大学保育1学年群） $n = 4$

C 群（大学保育2学年群） $n = 10$

D 群（大学保育4学年群） $n = 4$

A・B・C・D 群合計 $n = 32$

なお、A 群およびB 群はI 短期大学の同一授業の受講生、さらにC 群およびD 群は先とは異なるI 大学の同一授業の受講生である。

受講生に対して最終授業の際に実施した選択式質問紙での各設問の項目は、以下の6項目である。

- 設問① 絵本を題材にすることによって、自身の表現のイメージが広がったと思いますか。
- 設問② オーガンジー布を用いることによって、自身の表現の幅が広がったと思いますか。
- 設問③ 当日の創作作品の中で、自身のイメージを表現できたと思いますか。
- 設問④ この身体表現創作が、自身の表現力の向上に役立ったと思いますか。
- 設問⑤ 今後、保育現場において、絵本を題材とした身体表現活動を実践してみたいと思いますか。（保育科のみ）
- 設問⑥ 今後、保育現場において、布を用いた身体表現活動を実践してみたいと思いますか。（保育科のみ）

以下に、各設問に関するA～D 群それぞれの回答の分布をグラフ化したものを以下に示す。

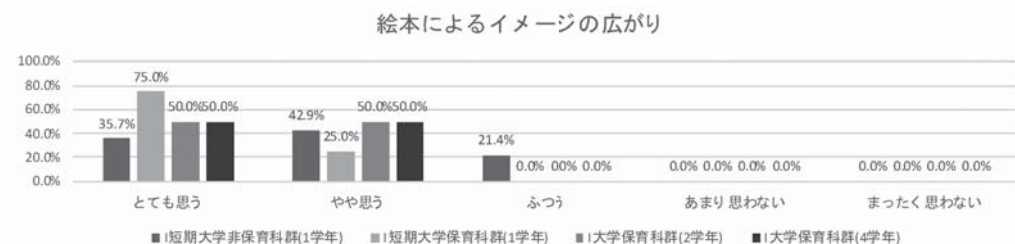


Fig.5 設問①への各群の回答結果

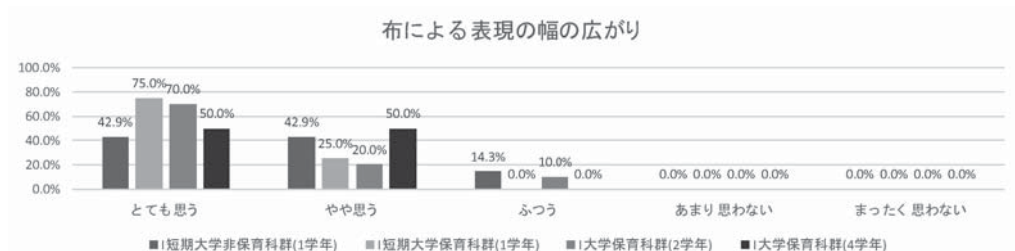


Fig.6 設問②への各群の回答結果

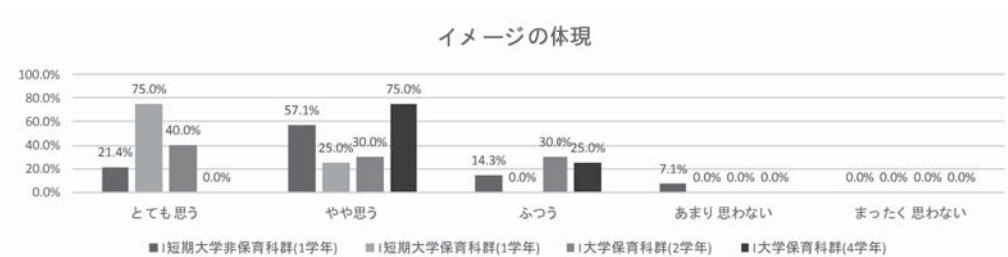


Fig.7 設問③への各群の回答結果

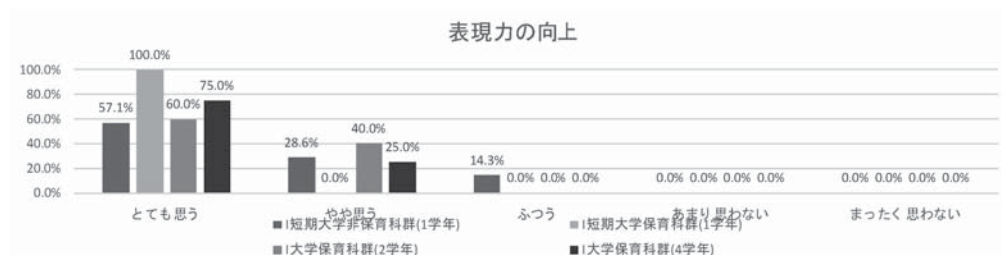


Fig.8 設問④への各群の回答結果

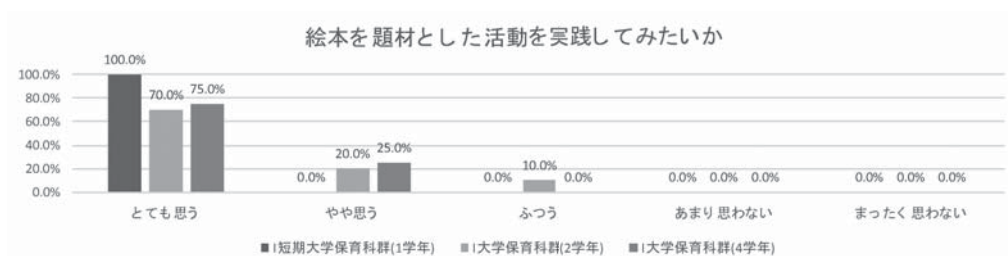


Fig.9 設問⑤への各群の回答結果

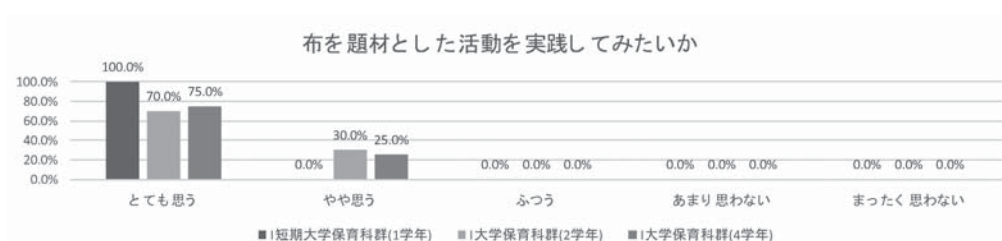


Fig.10 設問⑥への各群の回答結果

これらの結果より、以下の知見を得た。

設問①の「絵本を題材にすることによって、自身の表現のイメージが広がったと思いますか。」という問いに関しては、「あまり思わない」「まったく思わない」と回答した者は全群を通じて1人もいなかった。A群（短期大学非保育1学年群）の中には中庸の選択肢である「ふつう」と回答した者が3名（21.4%）いたが、他の保育3群は「とても思う」「やや思う」のいずれかを選択しており、絵本が自身の表現のイメージの広がりにも寄与したと考える者の割合が多いことが示された。

設問②の「オーガンジー布を用いることによって、自身の表現の幅が広がったと思いますか。」という問いに関しても、「あまり思わない」「まったく思わない」と回答した者は全群を通じて1名もいなかった。A群（短期大学非保育1学年群）の中には「ふつう」と回答した者が2名（14.3%）、C群（大学保育2学年群）にも3名（10.0%）いたが、他の保育2群は「とても思う」「やや思う」のいずれかを選択しており、オーガンジー布の使用による自身の表現の幅の広がりを多くの受講生が認めていることが示された。

設問③の「当日の創作作品の中で、自身のイメージを体現できたと思いますか。」という問いに関しては、「あまり思わない」と回答した者がA群（短期大学非保育1学年群）に1名（7.1%）、「ふつう」と回答した者がA群（短期大学非保育1学年群）に2名（14.3%）、C群（大学保育2学年群）に3名（30.0%）、D群（大学保育4学年群）に1名（25.0%）いたが、その他は「とても思う」「やや思う」のいずれかを選択しており、創作作品を通して自身のイメージを体現できたと考える者が多い様子が認められた。

設問④の「この身体表現創作が、自身の表現力の向上に役立ったと思いますか。」という問いに対しては、「あまり思わない」「まったく思わない」と回答した者は全群を通じて1名もいなかった。A群（短期大学非保育1学年群）の中には「ふつう」と回答した者が2名（14.3%）、いたが、他の保育3群は「とても思う」「やや思う」のいずれかを選択しており、身体表現創作が、自身の表現力の向上に役立ったと考える者の割合が多いことが示された。

A群を除く保育3群に対して回答を求めた設問⑤の「今後、保育現場において、絵本を題材とした身体表現活動を実践してみたいと思いますか。」という問いに対しては、「ふつう」と回答した者がC群（大学保育2学年群）に1名（10.0%）いたが、その他は「とても思う」「やや思う」のいずれかを選択しており、多くの受講生が今後絵本を題材とした身体表現活動を実践してみたいと考えていることが示された。

同じくA群を除く保育3群に対して回答を求めた設問⑥の「今後、保育現場において、布を用いた身体表現活動を実践してみたいと思いますか。」という問いに対しては、保育3群全員が「とても思う」「やや思う」のいずれかを選択しており、「今後布を用いた身体表現活動を実践してみたい」という今後の意欲に繋がっていることが明らかになった。

特に、設問②③④⑥に着目すると、布を用いた身体表現活動を通して、どの属性の受講生も「表現の幅の広がり」を実感し、「イメージの体現」や「表現力の向上」を認めている点が見いだされた。

4-3 自由記述式質問紙の分析結果と考察

さらに、選択式質問紙と並行して、受講生には自由記述式質問紙への回答も求めた。設問は以下の通りである。

設問⑦ 絵本「COLOR DANCE」を題材としたオーガンジー布を用いた身体表現創作を振り返って、学んだこと、心に残ったこと、気づいたこと、挑戦したいこと、感想等を記入してください。

自由記述式質問紙に関して、A～D群の全受講生の回答をテキストデータ化し、KHcoderを用いてテキストマイニング分析した結果を以下に示す。

4群の自由記述を全て合計した総抽出語数は2,033語、使用語数は374語であった。

Table1 に、4 群の自由記述の中で出現回数 2 回以上の語を、それぞれ頻出度が高い順に列挙した表を示す。

Table. 1 4 群の自由記述における出現回数 2 回以上の頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
布	47	知る	4	現場	2
表現	30	変わる	4	個人	2
色	28	保育	4	広がる	2
思う	27	用いる	4	考える	2
絵本	17	気づく	3	合わせる	2
使う	16	合わせる	3	今	2
動き	14	今後	3	残る	2
楽しい	11	作品	3	仕方	2
自分	10	自由	3	使い方	2
きれい	9	実習	3	刺激	2
動かす	8	心	3	少し	2
様々	8	人	3	色々	2
ダンス	7	想像	3	振付	2
違う	6	体	3	生まれる	2
オーガンジー	5	動く	3	前	2
感じる	5	難しい	3	全く	2
機会	5	踊る	3	全体	2
行う	5	ありがとう	2	素材	2
今回	5	グループ	2	組み合わせる	2
実際	5	意識	2	速い	2
授業	5	違い	2	題材	2
初めて	5	改めて	2	遅い	2
身体	5	楽しめる	2	挑戦	2
創作	5	活かす	2	虹	2
イメージ	4	感じ	2	発表	2
学ぶ	4	頑張る	2	部分	2
見える	4	気持ち	2	優しい	2
見る	4	強弱	2	遊ぶ	2
子ども	4	興味	2	良い	2
取り組む	4				

Table.1 より、以下の結果が導き出された。

出現回数 5 回以上の語は、頻出度の高い順に、布 (47) / 表現 (30) / 色 (28) / 思う (27) / 絵本 (17) / 使う (16) / 動き (14) / 楽しい (11) / 自分 (10) / きれい (9) / 動かす (8) / 様々 (8) / ダンス (7) / 違う (6) / オーガンジー (5) / 感じる (5) / 機会 (5) / 行う (5) / 今回 (5) / 実際 (5) / 授業 (5) / 初めて (5) / 身体 (5) / 創作 (5) の 24 語であった。なお、括弧内は出現回数を示す。

最も多く抽出された語は「布」であり、次いで「表現」や「色」「動き」「楽しい」「きれい」「動かす」「感じる」といった語が多く抽出されていることから、「布」を用いた身体表現活動が、受講生の表現や感性に何らかの影響を与えたことが示唆された。

次に、A ～ D 群の自由記述文の特徴を見いだすために、それぞれの群名を見出しとして含めた共起ネットワークを作成し、Fig.11 に示した。見出し語は正方形で囲まれている。

ここでは、出現回数 2 回以上の語を抽出し、比較的強くお互いに結びついている部分を自動的に検出してグループ分けを行い、その結果を色分けによって示すサブグラフ検出^{xi}により共起ネットワーク図を作成した。検出の手法としては、共起関係 (edge) の媒介性にもとづく Newman & Girvan の方法^{xii}による。なお、本論文ではグレースケールで示しているが、共起ネットワーク図の色分けは、KHcoder により自動処理により作成されたものであり、Fig.11 では 5 色に色分けされている。共起ネットワーク図は、出現回数の高い語ほど大きな円で示され、さらに、共起関係の

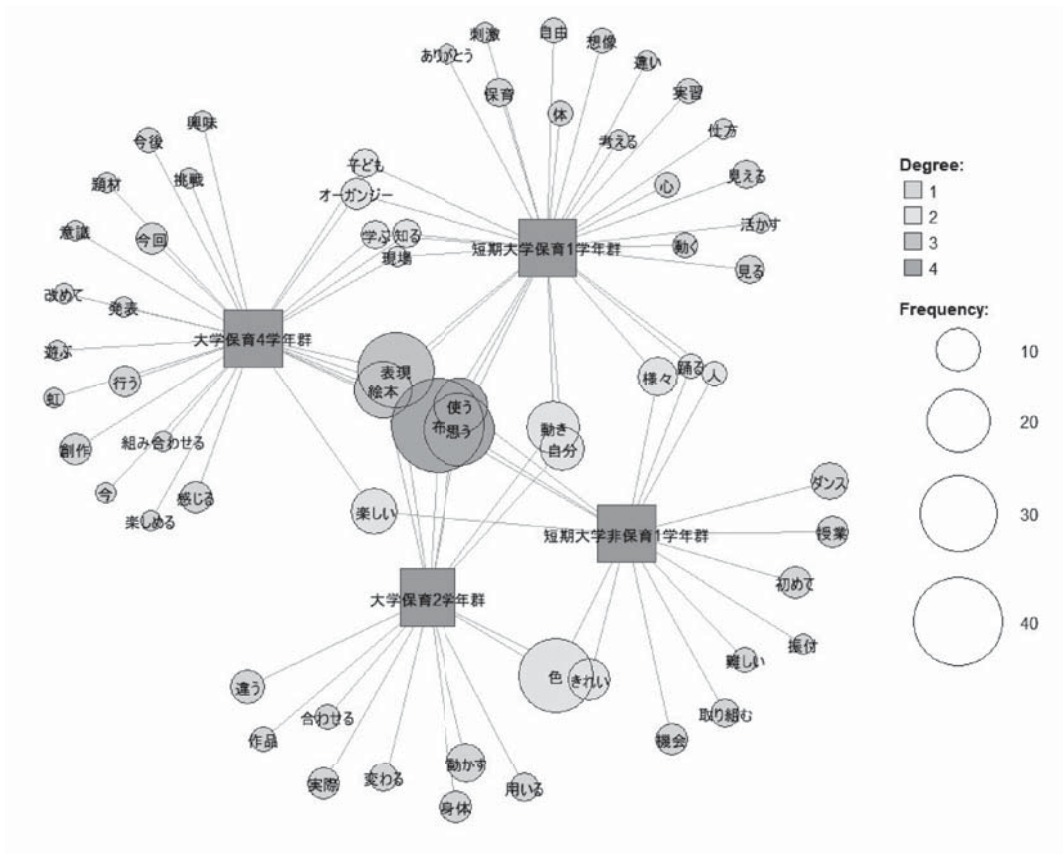


Fig.11 A～D群の群名を見出しとして含めた共起ネットワーク図

強い語ほど太い線で結ばれる。共起ネットワーク図においては、単に語がお互いに近くに布置されているというだけでは、それらの語の間に強い共起関係があることを意味しない点に注意が必要である^{xiii}。

Fig.11 より、以下の結果が導き出された。

共起ネットワーク図上にて A 群（短期大学非保育 1 学年群）とのみ結びついている語は「ダンス」「授業」「初めて」「振付」「難しい」「取り組む」「機会」の 6 語であった。

B 群（短期大学保育 1 学年群）とのみ結びついている語は「刺激」「自由」「想像」「違い」「実習」「仕方」「見える」「活かす」「見る」「ありがとう」「保育」「体」「考える」「心」「動く」の 15 語であった。C 群（大学保育 2 学年群）とのみ結びついている語は「違う」「作品」「合わせる」「実際」「変わる」「動かす」「用いる」の 8 語であった。

D 群（大学保育 4 学年群）とのみ結びついている語は「興味」「今後」「題材」「意識」「改めて」「遊ぶ」「虹」「創作」「今」「楽しめる」「挑戦」「今回」「発表」「行う」「組み合わせる」「感じる」の 16 語であった。

さらに、保育 3 群（B・C・D 群）にのみ共通して抽出された語は「表現」「絵本」の 2 語であり、全群（A・B・C・D 群）に共通して抽出された語は「布」「思う」「使う」の 3 語であった。

また、短期大学群である A 群（短期大学非保育 1 学年群）と B 群（短期大学保育 1 学年群）にのみ共通していた語は「様々」「踊る」「人」の 3 語、A 群（短期大学非保育 1 学年群）と C 群（大

学保育2学年群)にのみ共通していた語は「色」「きれい」、A群(短期大学非保育1学年群)とD群(大学保育4学年群)にのみ共通していた語は「楽しい」の1語、B群(短期大学保育1学年群)とC群(大学保育2学年群)にのみ共通していた語は「動き」「自分」の2語、B群(短期大学保育1学年群)とD群(大学保育4学年群)にのみ共通していた語は、「子ども」「オーガンジー」「学ぶ」「知る」「現場」の5語であった。

C群(大学保育2学年群)とD群(大学保育4学年群)にのみ共通していた語は見られなかった。

以上の結果より、今回の身体表現活動を通して、どの群に属する受講生も自由記述の中で「布」に関する感想や気づきを述べており、特に保育を専攻する受講生に関しては、「表現」に関する記述が多い点が見いだされた。

また、短期大学保育1学年群と大学保育4学年群の受講生は、「子ども」や「現場」といった語が共通して抽出されたことから、子どもの姿や現場での保育を意識して授業に臨んでいることが明らかになった。

以下に事例として、設問⑦に対する学生a～学生gの7名の自由記述文を引用する。これらの自由記述文は、Table.1、Fig.5～10、Fig.11の分析結果を、より鮮明に浮かび上がらせるものである。

設問⑦ 絵本「COLOR DANCE」を題材としたオーガンジー布を用いた身体表現創作を振り返って、学んだこと、心に残ったこと、気づいたこと、挑戦したいこと、感想等を記入してください。

学生a(A群:短期大学非保育1学年群)「優しい気持ちになれたし、色だけではなく、人との交わりも合わさっている感じがした。人と関わってこういうことなんだろうなと思った。」(一部抜粋)

学生b(B群:短期大学保育1学年群)「布を使うことによって様々な表現ができることを学んだ。1人1人どのように布を動かすか、体を動かすかによく違いが表れる表現方法だと思ったので、自分が保育現場に立ったら、こういった表現活動を取り入れて、子どもたちの想像力を刺激していきたい。」(全文)

学生c(B群:短期大学保育1学年群)「オーガンジー布を使って表現することで、絵本の世界に入ったような気がしました。自由に、自分たちの思うように表現することで、心も自由になりました。布がとてもきれいで、フワフワと舞うところが面白かったです。また、色の刺激や布の動きなど、子どもたちにとっても魅力的に見えるのではないかと思います。実習などにも活かしていきたいです。」(全文)

学生d(C群:大学保育2学年群)「いろいろな色や素材の違う布を用いることで表現の幅が一気に広がるのだなと思いました。また、たった1枚の布でも使い方によって全く雰囲気の変わる表現ができ、すごいなと思いました。今後、保育実習のときなど、機会があったらこのような布を用いた身体表現創作もやってみたいなと思いました。」(全文)

学生e(C群:大学保育2学年群)「布を使うことで、身体のみではなかなか表現ができなかったやわらかくくねる感じが、表現できた。手の動かし方や身体の動かし方で様々な表現ができ、とても良かったです。布を使っていたので、気持ちとしてもやわらかさ・優しさを意識して、布だから出来る動きができたのではないかと感じた。」(全文)

学生f(D群:大学保育4学年群)「オーガンジー布は薄くてひらひらとしているため、子ども達が普段の遊びでも喜んで使えるものだと感じました。オーガンジー布だけでなく、風呂敷や不織布などで代用できるのかなと感じました。」(一部抜粋)

学生g(D群:大学保育4学年群)「実際に体を動かしながら色について改めて学ぶことができることに気づかされた。2つの色を組み合わせればどのようなかなど、興味が惹かれる取り組みであるとわかった。また、色だけでなく仰いだときの音なども楽しめると思った。皆で走りながら虹を作るなど、何かに見立てて遊ぶことの楽しさも知ることができ良かった。今後子どもと関わる機会があったら今回使用した布をぜひ紹介したいと思う。」(全文)

5. 結言

本研究では、布を介して学生たちのイメージがいかに喚起されていくか、さらにはいかに創造的な身体表現が生まれていくか、その過程を明らかにすることを試みた。

これまでの大学や短期大学での授業実践においては、身体のみを用いた即興表現や創作への抵抗感や苦手意識を少なからず抱く学生がいた。特定の振付が存在しない自由さゆえに、表現への取り掛かりがつかめず、どのように動いて良いか分からないと戸惑う学生も存在した。しかしながら今回、布という素材を介することで、自由に動くことや表現することへの抵抗感が払拭、あるいは緩和され、自身の「表現の幅の広がり」を実感するとともに、「イメージが表現できたこと」への実感や「表現力の向上」を認めることのできた学生が多くいたことは、授業実践の大きな収穫でもある。

「いろいろな色や素材の違う布を用いることで表現の幅が一気に広がる」「身体のみではなかなか表現ができなかったやわらかくくねる感じが、表現できた」「布を使っていたので、気持ちとしてもやわらかさ・優しさを意識して、布だから出来る動きができた」といった記述からも、布の特性を反映した新たな動きへの気づきが生じた点が明らかになった。

また、「人と関わってこういうことなんだろうなと思った」という学生の自由記述文が示すように、1枚の大きな布を他者と息を合わせてなめらかに動かし、それらを幾重にも重ね合わせることで、他者との関わりへの意識がより一層高まった点も見いだされた。

さらには、「自由に、自分たちの思うように表現することで、心も自由になりました」という記述が示すように、布を用いた身体表現が受講生に解放感をもたらした点も意義深い。

以上のように、本研究によって、布を介して創造的な身体表現が広がりをみせる過程の一端を示すことができたといえよう。

本研究は、2つの授業、計32名の受講生を対象とするものであり、分析対象となる人数が十分とは言えない点は課題の1つであると捉えている。今後も、布をはじめとする様々な素材を用いた身体表現の在り方を検討していくとともに、実践に基づくデータを蓄積しながらさらに研究を継続し、そこで得られた知見を授業や幼児教育・保育現場に還元していきたい。

6. 謝辞

本研究を進める上でご協力いただきましたI短期大学保育科および表現文化学科の2017年度「ダンス入門」受講生、I大学の2017年度「幼児保育特講」受講生の方々に心より感謝申し上げます。

7. 参考・引用文献

- i 秋田有希湖・石賀直之（2015）おと・かたち・うごきでアプローチする総合表現の実践—うごきと布によるかわり・つながりを中心に—, 全国保育士養成協議会第50回研究大会研究発表論文集, 154-155
- ii 石賀直之・秋田有希湖（2015）材料を基にした造形、音楽、身体的表現の萌芽に関する試論, 全国保育士養成協議会第50回研究大会研究発表論文集, 156-157
- iii 高橋うらら（2007）ダンス・身体表現あそびにおいて学習者が動きのイメージを広げやすい教材の検討：課題学習“しんぶんし”の新聞紙を布に代えて, 日本体育学会大会予稿集, 58（0）, 332
- iv 松山益代・伊藤裕子・荒木みどり・井戸裕子・福田理恵・眞鍋隆祐（2018）表現遊びにおける身体性と造形性—乳幼児と布との関わり—, 日本保育学会第71回大会研究論文集, 369
- v 伊藤裕子・松山益代・荒木みどり・井戸裕子・福田理恵・眞鍋隆祐（2018）表現遊びにおける身体性と造

形性一幼児期の素材としての布一, 日本保育学会第 71 回大会研究論文集, 370

- vi 古谷朝映子 (2018) 保育現場における用具を活用した運動教材の一例一布を用いた運動一, 川村学園女子大学研究紀要, 9 (2), 129-135
- vii 梅原俊子 (1998) 知的発達障害幼児の動きの獲得について: 布を使った運動遊び, 日本保育学会大会研究論文集, (51), 762-763
- viii 秋江俊子・野村勝彦・安達敬子・居林弘和・岡本裕之 (2000) 知的障害幼児における布を使った運動遊び, 筑波大学学校教育論集, 23, 15-19
- ix Ann Jonas (1989) COLOR DANCE, Greenwillow Books
- x Irmgard Bartenieff, Dori Lewis (1980) Body Movement: Coping with the Environment, Routledge
- xi 樋口耕一 (2011) KHcoder2.x リファレンス・マニュアル, 63
- xii Newman, M. & M. Girvan (2004) "Finding and evaluating community structure in networks," *Physical Review E* 69 : 026113
- xiii 樋口耕一 (2011) KHcoder2.x リファレンス・マニュアル, 61